

薬剤アレルギーチェックを適切に行うデータベースの開発

～電子カルテ情報共有サービスとの連携も含めて～

○米谷典¹、大西美和子¹、上村真由¹、大塚美也子¹、小倉麻美¹、阿部純子¹、堀裕奈¹、長尾理乃¹、瀬戸口瞳¹、栗野美沙¹、中澤奈緒子¹、平山優花¹、雨宮理¹、奥覚子¹、栗原輝子¹、杉平直子¹

¹データインデックス株式会社

【背景・目的】

患者のアレルギー情報を登録し、処方薬のチェックを行うシステムは普及しているものの、アレルギー被疑薬の登録が医薬品名のみに限られる場合や、交差アレルギーに関連する系統の登録範囲が限定的な場合がある。その結果、アレルギー情報が適切に登録されず、チェックをすり抜けてしまうことが懸念される。アレルギー被疑薬の登録は、1)系統名や成分名を登録、2)商品名を登録、3)電子カルテ情報共有サービスの薬剤アレルギー用コードを取得、の3つのケースが考えられる。これら全てのケースにおいて、アレルギー被疑薬の登録と、処方薬とのチェックを適切に行うシステム構築のためのデータベース開発を試みた。

【方法】

アレルギー被疑薬の登録ケースごとにデータベースを開発した。1)成分名や系統名に対し、フリーテキストで検索可能な索引テーブルを作成。抗生物質など広い概念の系統名については下位の系統を選択できるよう、ツリー構造のテーブルを作成。2)アレルギーチェックの対象とすべき有効成分および添加物を定義し、医薬品コードとの対応テーブルを作成。3)薬剤アレルギー用コードのうち、剤形・規格・銘柄不明コードに対し、有効成分を登録。

登録場面ごとに取得する有効成分や添加物、系統に対し、チェック対象となる関連成分、プロドラッグ、鏡像異性体、関連系統を対応させた。加えてチェック対象を制御するフラグを搭載した。

【結果】

以下が可能となった。a)医薬品名に加え、成分名や系統名でのアレルギー被疑薬の登録。b)有効成分に加え必要な添加物もチェック。c)ツリー構造による広い概念の系統にひもづく下位の系統の表示・選択。d)関連する成分、系統を含めた漏れのないアレルギーチェック。e)薬剤アレルギー登録用マスタとの連携。

【考察・結論】

本データベースの活用により、アレルギー被疑薬のきめ細かい登録と適切なアレルギーチェックが実現できると考える。